It is trip!!

涙猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｉｔ ｉｓ ｔｒｉｐ！！

【Ｎコード】
Ｎ５１８３Ｃ

【作者名】
涙猫

【あらすじ】
金魚を排水溝に流してしまいケンカしたことから魔王になってやると拗ねた幼馴染に主人公とその幼馴染が付き合ってあげていると き、この物語は始まる。いきなり異世界（現代）にやってきてテンションのおかしい少女に拾われるお話。

STORY：01

「なぁ、ミヅキ
そろそろ『魔王になってやるー』とか言うのやめろよな」

「い・や・で・す！
絶対に魔王になってみせます！」

俺がいつものようにそう言うと、ミヅキは少しムッとした顔をこちらに向けた。
くそう、美形は何やっても似合うからムカつくんだ。
ちなみにミヅキは２６歳の魔剣士（自称魔王）なわけだが、
これといって具体的に村を襲ったりしていないし、むしろ村の皆からは好かれている。
そもそも、何故「魔王になる」とか言い出したかというと、
二年前に俺がミヅキが大事にしていた金魚（リリィと言うらしい）を誤って排水溝に流してしまって、
それで一応誤ったもののミヅキは拗ねてしまって、いい加減呆れた態度をとると余計に拗ねて、
『もう良いですよ、魔王になってぎゃふんと言わせてやります！』
とか言い出したことが始まりだ。

俺が「いい加減諦めろよ」と言うと、ミヅキは眉を八の字にした（本当に２６歳かアンタ）

「嫌ですよ！
大体ね、クレイが私の大事な大事な金魚リリィちゃんを排水溝にっ・・・！

排水溝に流したから、いけないんです！」

よよよ、と泣き出してしまったミヅキを慰めるべくぽんぽん、と肩を叩くと、
ミヅキは「うわあぁあ」とか言って弱弱しく腕を振り払ってきた。
まず金魚を排水溝に流されたくらいで拗ねて「魔王になってやる」とか言い出すのがおかしいだろうが。
俺にどうしろって言うんだよ。
とか思いつつもここはミヅキの家だし、お邪魔させてもらっているわけで我侭も言えず、
とりあえず一緒に来ている幼馴染2人に視線を向けると、
レインとルイは我が物顔でテレビを見ていた。（かなりムカつく）

レインとルイは俺の幼馴染なわけだが、ミヅキの幼馴染でもある。
というか俺とミヅキとレインとルイは幼馴染なんだが。
（ちなみにレインとルイは兄弟、レインが兄でルイが弟だ）

「おいレイン、ルイ
一応ここ、ミヅキの家なんだから遠慮してやれよ」

「えー良いだろクレイー
第一、ミヅキがいつまでも拗ねてるのが悪いんだろ
しかもオレは関係ないしー？」

いやそれも正論だが。とレインに言い返すと、今度は弟のルイが素晴らしい笑顔を向けてきた。

「そうだよ、クレイ
クレイは遠慮しすぎなの。
あ、それとも何？僕に逆らうつもりなの？ふふふ」

「いやすいませんどうぞご自由にお使い下さい」

素晴らしく黒い笑顔を向けてきたので俺は冷や汗をだらだらと流しながら、（何故か）謝った。

・・・なんで俺が謝らないといけないんだ、と思いつつもチキンハートな俺は一緒にテレビを見ることにした。

するとミヅキは構ってもらえないのを寂しく思ったのか、ちょこちょこと歩いてきた・・・かと思えばテレビの前に仁王立ちして勝ち誇った笑みを浮かべた。

「聞いてください皆さん！！
私はあなた達がここに来てくれず寂しさに明け暮れている間に素晴らしいものを発見したのです！」

コイツ何気に寂しかったのかよ、ていうか偉そうに言うんじゃねえよ。

と思いつつも心優しい俺は「どうしたんだよ」と返事を返すと、ミヅキは何やら嬉しそうに「あは」と間抜けに笑ってポケットから何かを取り出そうとゴソゴソし始めた。

「ねぇ、これだけ大げさに言っておいて大したことなかったら僕、怒るよ？」

「（びくっ）」

真っ黒な（目の笑っていない）笑顔にびくりと怯えたようにミヅキは肩を震わせて、またゴソゴソし始めた。

「し、心配はご無用です！
それほどまでに凄いものなんですよ、今お見せしますから！！」
ちょっとどもりながら言うとミヅキは何かを手に握り締めて、
ぎゅっと握った拳を頭上につきあげた（恥ずかしくないのかいい年して）

「え、なになに！？
宝石とかーそういうのか何かか！？」

『だったら俺にくれ』、とばかりにレインが食いついた。
するとやっぱりミヅキは嬉しそうに「ふふふ」と笑った（ちょっと不気味だ）

「宝石よりも凄いものですよー！
さあ、『Ｉｔ　ｉｓ　ｔｒｉｐ！』」

ミヅキが高々と叫んだと同時に、俺たちは光に包まれた。

STORY：02

その日、私　刹那（せつな）　鏡弥（かがみ）１７歳（やけに説明的だな）は、いつもと変わらない日常を満喫していた。
中々広いマンションに１人暮らしをしている私は自由だ。
両親が海外で中小企業の社長をしているからだ。
仕送りもけっこう送ってくれるから、お金には不自由しない。
・・・まあ、親が働いてくれたお金だから必要以上は使わないようにしているけれど。

「あー・・・ヒマだなあ」

呟くと、私の言葉は空気に混じってとけた。
本当にヒマだ、ヒマすぎる。
普通なら学校があるだろうけど、生憎私は高校はやめた。なんだか飽きてしまった。
そもそも私は女子ってなんか苦手なんだ。キャピキャピしてて、噂話が好きで、苦手。
人の噂をして何が楽しいんだと私は思うわけだ。
と少し感傷的になっていると、私の目の前で大きな光が現れた。
・・・なんだコレ！

「うわあぁぁあ何ですかコレ！ドッキリ企画ですか！！」

おおお落ち着け私！とかなんとか言っていると光は消えた。・・・
と思ったのもつかの間、私は驚きで声も出なくなった。

「うおッ、なんだよココどこだよおいミヅキ！」

「え、ししし知りませんよそんなの！
あ、ちょっとクレイどさくさに紛れて今私の髪の毛引っこ抜いたでしょう！」

「あー暑苦しいー！ルイーどうしようお兄ちゃんは死にそうです」

「ミヅキ、いい加減にしてよね？
僕そろそろ堪忍袋の緒が切れそうなんだけど。
それと兄さんあんまりうるさくすると刺すよ？」

・・・・・・・なんですかコレェ！！
見知らぬ男が四人（美形ぞろい！そして1人なんか黒いよ！）がなんか団子状態だんですけど！
とかなんとか考えている頭をそっちのけにとりあえず私は叫んでみた。

「キャァァァァ！変態下郎共が今ここにィ！
誰か助けてェェェ！」

・・・と叫ぶとあら不思議、ヒーロー登場！なんてことになる筈もなく、男四人は目を見開いて私を見てきた。

「ちょ、俺ら変態じゃないんですけどォ！
お姉さん勘違いにも程があるってェ！」

フリーズ状態からいち早く回復した男（多分クレイって呼ばれてた人）が必死になって否定してきたけど、そんなの関係ねえ！（某芸人風）

「黙らんかい変態！っていうかどうやって入ってきた貴様らァァァ！

お前らあの・・・そんなこととしたらアレ・・・アレやるぞォ！」

「アレってなんだよお前ェェェ！！」

「くっそう変態のくせにツッコミが早い！合格！」

「何がだよォォォ！」

なんかコイツとは上手くやっていけそうだ！と意味不明なことを考えながら私はあとの3人を見ると、
もの凄くきょとんとした顔でこちらを凝視していた。（まあ当然のことだ）

「・・・で、なんですかあなた達」

「ええ今のやりとりスルーですかスルーですか！」

（多分）クレイとか言う人がギャーギャーと騒いできたから「うぜえ」と言うとその人は「ありえねえ！」と叫んでから黙った。（なんだコイツ）
そして黙ったかと思えば、また口を開いた。

「俺はクレイ、１６歳の剣士！」

「私はミヅキ、２６歳の魔剣士です」

「オレはレイン１８歳の・・・武道家？まあ肉弾戦向き！
ちなみにルイとは兄弟な！」

「・・・君たちもうちょっと用心深くしなよ

はぁ・・・僕はルイ、１５歳の魔道士だよ
ていうか兄さんとは義兄弟だよ」

順番にクレイは青っぽい黒の髪の毛に、スカイブルーの瞳
ミヅキはシルバーの鎖骨あたりまである髪の毛に色素の薄いグリーンの瞳
レインは黄色っぽいオレンジの短髪に、うすい茶色の瞳
ルイは長めの漆黒の髪の毛に、真っ赤な瞳だ。
・・・・おかしいだろ！

「やっぱ変態じゃんんんん！！
い、いやあーたすけてー」

「思いっきり棒読みじゃねえか！」

やっぱりナイスツッコミ、クレイくん！！

STORY：03

「・・・その話を私に信じろと？」

とりあえず私も自己紹介したあと、怪訝そうな目で四人を見やると、ルイを除く三人は気まずそうな顔をした。
ちなみにルイは仏頂面。この人は怒る時というか、腹黒い発言する時に素晴らしい笑顔になるらしい。

「・・・信じてほしいなー、と」

クレイは恐る恐るといった感じで言った。だから私は「お前は黙っとけ」というとショックを受けていた（だってコイツ反応が最高だ！）

コイツらの話によると、
自称魔王（正確には魔剣士・・・らしい）のミヅキさんが庭で拾ったという水晶玉のようなものを頭上に上げて「Ｉｔ　ｉｓ　ｔｒｉｐ！」と叫んだ所、光に包まれて――――今に至る、ということらしい。
彼らの推測によると、自分達は異世界から来たのではないかということだ。
でも話によるとその世界は地球となんら変わりなく、スーパーがあればテレビもあるらしい。
違うことといえば、魔法が使えること（使える人と使えない人がいるらしい）、
それと彼らが言ったように「剣士」とか「魔道士」とかそういうゲームでしか聞かないような職業があるらしいことだ。

「・・・証拠とかあるんだったら信じてやらんこともないよ」
さすがに私もそこまで鬼じゃないからね、と偉そうに続けると四人はもの凄く微妙な顔をした。ムカつく。
「あー証拠は・・・おいミヅキ」
「ははははい！
え、っと・・・これが水晶玉――あと、説明書です」
「説明書あるんだったら最初から出しなよバカだね」
クレイとか言う人に言われると、ミヅキって人はやけにどもりながらどこからか水晶玉と説明書を取り出した。（これも魔法かな？）
そしてその後にルイって人に真っ黒な笑みを向けられるとガタガタと震えだした。
ていうかこの人本当に２６歳なんだろうか、見た目も若いしなんていうか・・・へたれだ。
「んー・・・何々？」
水晶玉を一通り眺めた後、説明書を手にとって見ることにした。
「えっと・・・『これを頭上に掲げて「Ｉｔ　ｉｓ　ｔｒｉｐ！」
―（イッツ　イズ　トリップ）と叫ぶと』・・・・」
変なところで区切ると、四人は不思議そうな顔をして「早く読め」と言いたそうな目でこっちを見てきた。
だってこれ・・・読み上げるとミヅキって人また怒られるんじゃ・・・とも思ったけどやっぱり自分の身が優先だ。

私は読み上げることにした（そこ！薄情とか言わない！）

「『叫ぶと』――『異世界に旅行できる』・・・って書いてあるけど・・・？」

私が言うと、やぱりミヅキさんは顔が青褪めて、クレイは明らかに怒った表情をして、ルイに至ってはこれまで見たことがないほどに真っ黒な笑みを浮かべていた。

レイン、って人はそんな二人を宥めているがそれは今の二人（主にルイ）には逆効果だ。

「お前・・・知ってたのか！？

知っててお前やったのか？だったら俺ホントお前のこと嫌いになりそうなんだけど！」

「あああの、しし知らなかったんですよよよよ」

クレイは思ったよりも怒っていたらしく、ミヅキさんの肩をがしっと掴んで揺さぶっている。

脳みそシェイクだ脳みそシェイク！！

ていうかミヅキさんどもりすぎだろうが怯えすぎだろうが！

「へぇ、よく知りもしないのにそんなモノを僕たちに見せてくれたんだ

しっかりとお礼しないとダメみたいだね？」

「いやあぁああ！ちょ、ルイやめて下さい！！」

「イヤだなあ、遠慮しなくても良いんだよ

ちゃんと天国に連れて行ってあげるから、ね？」

うわあ、この人すっごい怒ってる！やっべえなコレ軽く殺人起こそうとしてるよこの人！
クレイもさすがにルイの怒りようにビビったのか、怒るのも忘れてガタガタブルブルと震えている。

「おいルイ、やめてやれって
ミヅキだって悪意があってのことじゃないだろうし、なあ？」

レインが可哀想に思ったのか、そう言ってミヅキさんを見ると、ミヅキはもの凄い勢いでこくこくと顔を上下に振った。脳みそシェイク！！（私よ黙れ）

「・・・だったら
だったら、この人が――鏡弥（かがみ）がここに住まわせてくれるっていうんなら、許してあげる」

「・・・何言ってんのォォォ！！」

思わず私はルイへの恐怖も忘れて叫んだ。っていうかツッこんだ。

STORY：04

前略、外国でせっせと働いている母さん父さん。
私は今、人生最大の危機に陥っているかもしれません。

「ね？そしたら僕たちは住む家も確保できるでしょ？」

「えええええ」

奥さんちょっと話が飛びすぎてやいませんか！（落ち着け私ィィィ！）
第一なんでミヅキさんを許す条件がそれなんだよおお！
むしろ私はミヅキさんが許してもらわれなくっても関係ないんですけど！

「おいルイ！お前それはなんでも突飛すぎるだろー」

うわあレイン様ありがとう！と思ったところだがまずお前が話を振ったからこうなったんだろうが！
ちなみにクレイとミヅキさんは恐怖に凍り付いて全く役に立ってくれません。（あれ？私何気に酷いかな）

「でもね、君が僕たちを住まわせないとしたら僕たちは不法入国も同じなんだから、仲間だと思われて君も巻き込まれるかもしれないよ？
　っていうか僕が絶対に巻き込んであげるよ、ふふっ」

「わ、わあー喜んで！ココに住んでいいですよっていうか住んでくださいィィィ！」

「うん、そう言うと思ってたよ
無駄な殺人をせずにすんで良かったなあ」
怖ェェェ！この人断ったら殺すつもりだったのか！ちょ、怖すぎる
この人ちょっともう怖すぎるってこの人！

「・・・ホントにいいのか！？」
話を聞いていたクレイは私に飛び掛らん勢いで肩を掴んで揺らしてきた。うわあ、初めての脳みそシェイク！！（どうした私ィ！）

「うううん、だってほら、その、ね・・・・」
語尾を濁すと、私のルイへの恐怖感が伝わったのかシェイクするのをやめて、哀れむような視線を向けてきた。
この人も随分と苦労しているんだろうか、合掌。

「あああありがとうございます！あなたは私の命の恩人です！！
鏡弥（かがみ）さん、本当にありがとうございます！！」
今度はミヅキさんが私の両手をとって情けないことに号泣しながら言ってきた。
なにこの人触んないでよ、ちょ、この人の手でべたべた！！どんだけ怖かったんだよお前！

「別に良いですよ汗べたさん」
「汗べ・・・！うわあぁあぁん！！」

泣き出したよコイツ！どんだけお前泣き上戸なんだよこの汗べ泣き虫！！
うっわもう部屋の角でおいおい泣くなキモイから！

「あーそのーアイツいっつもあんなだから、気にすんなよ
それと、ありがとな」

「あ、いえ別に」

私も命が惜しいので、とは口に出さずに視線で訴えると「ははっ」とレインさんは苦笑した。
なんかこの人マイペースだなあ。
ていうかこの人妙に伸ばした喋り方するよなあ。

「とりあえず、よろしくね
あんまりうるさくしないでね、思わず僕、息の根止めちゃうかもよ？あははっ」

「笑い事じゃねええ！腹黒大魔王がァァァァ！！」

「うわあ、僕そこまで言われたの初めてだよ
鏡弥（かがみ）といると退屈しないかも。あぁでも君ちょっとうるさいよね」

ちょっと調子にのった自分を反省します、ごめんなさい。と謝るとルイは「ふぅん」とだけ呟いてもの凄く嫌味な感じの笑顔を浮かべた。

「えーあーまぁ、なにはともあれ、よろしくね。
私の家は親もいないからあんまり気にしなくてもいい・・・けど・・・くれぐれも逮捕されるようなことは、ないように」

私が主に腹黒大魔王に向けて言うと、当の本人は「ふふっ」と随分愉快そうに笑った。（うわあ凄い殴りたい！）

「とにかく、だ」

「私たちはこれから」

「ココに住まわせてもらうからー」

「・・・よろしくね」

「うん・・・よろしく」

奇妙な生活が、始まりそうです母さん父さん。（でも少しだけ楽しいかもしれない）

STORY：05

あれから数日、俺たちはようやく異世界というものに慣れた。
といっても俺たちがいた世界とあまり変わらないが。

「あッ！ちょっとクレイ反則です！その技使ったら絶対勝てないじゃないですか！」

「ミヅキが弱いだけだろうが」

「・・・！」

俺が言うと、ミヅキはショックを受けた顔をした。何を今更。ミヅキが弱いのは今に分かったことじゃないというのに。
ちなみに今は格闘ゲームをやっている。鏡弥の私物らしい。
鏡弥はどうやら学校に行っていないらしい。引きこもりだ。
そんな鏡弥は俺とミヅキがひたすらにゲームしているのをじーっとチョコをばくばく食いながら見つめている。（最近大食いだということが判明した）
レインとルイは鏡弥が与えてくれた部屋でトランプをしているらしい。仲の良いことだ。

「・・・あのさ、ミヅキさん」

「え、あ、なんでしょう」

鏡弥がミヅキに話しかけた。お前どもり過ぎだろ、という目でミヅキを見たが気付かないらしく、ミヅキは鏡弥を不思議そうに見つめた。

「ミヅキさんは防御をあまりしてないですよね
防御したら大分ＨＰの減りも少なくなるし戦いやすくなりますよ」

「え、え、あああありがとうございます！！」

鏡弥がアドバイスするとミヅキはありえない位に目を輝かせた。
「よーし頑張ります！」とか言って張り切っているところ悪いが俺はもうやめたいんですけど。

「よぉーしクレイ！
もう一発やりますよ！」

「あーごめんミヅキ俺もう疲れたからやめるわ」

「な・・・！逃げるんですかクレイ！」

子供みたいな言い方に、ばーか、と短く返すとミヅキは「酷いです！」とか言って喚きだした。

「かかか鏡弥！聞きましたか、今の暴言を！」

「うんバッチリ聞いちゃったよ鏡弥さん！
よぉしココは鏡弥さんがぎゃふん！と言わせてみせるわよー！」

「ちょ！おま、『わよー』ってキモイんだよ何だよ今更キャラ転換はきかねぇぞ！」

「何よ知ったふうな口聞くんじゃねぇわよ！髪の毛引きちぎってやるわよ？」

「聞くなよ！ていうか無理やりなんだよ喋り方！」

コイツマジで付き合ってられねえ！何！？このツッコミどころ満載な会話は！！

ミヅキとか対応に困ってフリーズだよお前どうしてくれんだ！

「アンタがミヅキ苛めるからでしょーが！」

「苛めてねぇよ！っていうか何さり気なくミヅキの肩もってんのお前！？

いつの間にそんなに仲良くなったんだよ！」

「ぐへへへッ良い質問だぜこりゃあ！

答えてやろうか答えてやろうか！！どうだ答えが知りたいだろう！」

「・・・・」

ウゼェェェ！！ウザ過ぎるんですけど！！

なんだよコイツ、ミヅキまであんぐりしてるじゃん！味方にあんぐりされてるじゃん！

「どうしたァ！気になって言葉も出まいか！！ふはははッ」

・・・・どうしよう心の底からどうでもいい。

「ふっ、仕方あるまい。
教えてやろう！私とミヅキの間にはな・・・チョメチョメなことがあったのだ！！」

「おいィィィ！チョメチョメって何だお前ェェェ！」

「はっ野暮なことは聞くもんじゃあないよあんちゃん！なあミヅキ？」

「え、あ、は、はい・・・？」

・・・・・本当に俺、ここに住んでいて良いんだろうか。

とりあえず、

「・・・・・・・疲れた」（「あれあれクレイ？私とミヅキの親密さに参ったのかな？あっはっは」「ちょっと黙れよ」）

俺のこれからの生活は前途多難だ。

STORY：05（後書き）

鏡弥の名前のふりがな無しにしたんですけど、もう大丈夫ですよね？

鏡弥（かがみ）です、ややこしい名前ですいません。

STORY：06

「あ、レインごめん、そこにある醤油とってくんない？」

「はいよー」

現在気分は上々（いや某歌手の歌ではないが）、五人分の昼食をつくっている。
ちなみに私の中で火曜日は和食、と決めている。そして今日がその火曜日だ。
ルイは味噌汁よりもおすましの方が好きらしいので、おすましを作っているところだ。
私は味噌汁の方が好きだけど腹黒大魔王の機嫌をとって損になることはまずない。

「ありがと」

「いえいえー
おすまし・・・か。オレ前の世界では洋食ばっか食ってたから、和食って新鮮なんだよなあ」

「へぇ、そうなんだ」

まぁ名前から考えて日本名ではないからそうなんだろう。
レインは私の料理場面を見ていても面白くないのか、リビングに戻ってテレビを見出した。
別に料理はわりと好きなほうだからいいけど、人が料理を作っているのに料理を食べる当人が寛いでるってちょっとムカつくなあ

「あるっ晴れった　日のこと～♪」

私は少しムカついたのを紛らわせるために歌を歌いながら料理する。歌、っていうかぶっちゃけアニソンだよなコレ。良いんだよもう私はオタクってことで！

可愛いじゃんハ○ヒ！萌えるでしょうが！と意味の分からん文句をつらつらと心の中で言いながら歌い続けながら料理をする。（あれ、私って意外に器用だったりして？）

「不可能じゃ　なっいっわ！」

「それってアニソンだよね」

「どぅわ！？」

サビのラストスパートな感じのところを歌っているとルイに後ろから声をかけられた。いきなりの事に変な声を出すと「色気ないね、ホントに女？」と言われた。

くそう、お前こそそんな綺麗な顔して本当に男か！（あ、言っててちょっと悲しくなってきた）

「な、な、なんでしょうかキングオブ腹黒」

「八つ裂きにしてあげようか」

「っつ、謹んでご遠慮申し願います・・・」

私が怯えを全身でアピールすると「つまんない」と彼は一言呟いた。お前つまんないとかそういう問題じゃないだろうが！人はお人形じ

ゃありません！

「へぇ、今日は和食・・・ね」

「うん、火曜日は和食って決めてんの」

私が言うと、ルイはふーんと淡白なリアクションを返してきた。
なんか虚しいぞおい。でもまあこの人が淡白なのは毎度のことだから気にしちゃだめだ私！

「へぇ！オレは初耳だぜー」

「え、そう？」

ちょっと虚しくなった所にちょうどよくレインがテレビから離れて台所にやってきた。
最高のタイミングに私は嬉しくなって笑顔で答えた。
そしたらレインが

「意外だなー」

なんて言うから、私は首をかしげる。

「なにが？」

「分かんないの？兄さんは鏡弥みたいな大雑把な人間がそういうの決めてるのが意外だって言いたいんだよ」

「え、」

ルイの言葉にレインは間抜けな声を出した。ていうかルイ失礼すぎだろうが。少なくともレインはそういうつもりで言ったんじゃない！（と、信じたい）
レインはルイのキングオブ腹黒加減にめんどくさくなったのか、またテレビの前へと戻ってしまった。

「そんなしょうもない事よりも僕は味見がしたい」

「はあ？アンタ自分で話をこじらせといてしょうもないことって「僕は味見がしたい」

「いやだからさあ、「僕は味見がしたい」

「だから「僕は味見がしたい」

ああムカつく！どれだけ味見がしたいんだどれだけおすましが好きなんだ！！
ルイの素晴らしい笑顔が更にムカつきを倍増させている。ああもうムカつく！でもこれ以上やりとりを続けると嫌味攻撃が始まるのは目に見えている。

「・・・勝手にしなよもう」

「わーいありがとー」

「棒読みだよこんちくしょうめェ！」

こんな兄弟とのお昼は疲れが溜まります（しんどいしんどい、誰か助けてー）

STORY：07

こんにちはこんばんは、又はお早うございます毎度お馴染み鏡弥です。
読者の皆様も私の名前になれてきた頃ではないかと思うのですが・・・
・え？何？「読者」とか禁句？おっといけねぇ私としたことが。
とまあ今のは華麗にスルーの方向でお願いします鏡弥です（あれ？2回目かなこれ）

とりあえず、そんなことはどうだって良いんです。とりあえずこの状況さえどうにかなれば。

「鏡弥！私は海に行きたいです海に！！」

「何言ってるの？僕は映画見に行きたいって言ったでしょ？刺すよ？」

「えーオレは買い物行きたいんだけどー」

「だから私は海に「うるさい黙れ僕は映画見に行きたいって言ってんだろうが分かんねぇのかカス」

「えええええ！皆我侭すぎんだろうが鏡弥困ってんだろうがっていうかルイ黒ォ！！」

・・・私は問いたい。この人たちは何を考えているのか。
私が一言「どっか行こうぜ！」と男前に言うとこんな言い合いが始まった。
ていうかルイがこれまでにない程黒いんだけどどうした。それが本

性？いつものまあ可愛らしい口調はどこ行ったよ！

ついでに言っておくけど海とか行きたいってお前、私車運転出来ないよ？

しかも映画ってお前、映画館なら近くにあるけど金どうすんだよ。私持ちか、そうとしか考えられないよな。お前らのせいでどんだけ金使ってると思ってんだ？こんちくしょうめ。

あとレイン、買い物行きたいって金使わせる気満々だなあオイィィィ！！

そしてクレイ、ありがとうもう君のその優しさだけで充分さ、お姉さんは。（いつから私はこんなでっかい兄弟もったんだ）

「・・・あのさ皆「僕は映画に行きたいの。分かってる？」

「だから私は海に行きたいんです！ルイだって暑いでしょう！？」

「クーラーついてるから暑くないよ」

「オレは買い物行きたいしさー」

「もうお前らちょっと黙れェェ！！俺はツッコミに疲れたぞお前ェェェ！！」

いかん、コレはもう収拾のつかない事になってしまったようだ。

ということは誰かの意見を通さないといけない。

でも誰の？いやあ、そんなの決まってる。魔王様のだ。あ、いや、ミヅキさんは魔王を名乗ってるけどそうじゃなくて、この場合腹黒大魔王ね。

ていうか珍しくミヅキさんがルイに抵抗してるな。後で絶対あの人トラウマが一つ増えるだろうに。合掌。

「あのー！ちょっと良いですかーッ！」

声を張り上げて言うと、いや、張り上げるっていうかむしろ叫んだ。そしたらさすがに皆も言い争いをやめてこっちを向く。ルイの笑顔が黒い。私は１００のダメージをくらった。でも大丈夫、まだ生きてる。だって私のＨＰは７００が最高値だから！ちなみにレベルは１０か８あたり。曖昧なのは仕方ない。アドリブだ。

「あの、じゃあ映画に行こう。うん、そうしよう」

「ふふっ、君もたまには役に立つんだね」

「えー私は海に行きたいんですけど！」

「君は黙ってなよ」

「オレ買い物行きたい！」

「あああああ！これ俺もうノイローゼなるんじゃねぇか！ツッコミノイローゼ！そのうち飛び降りるんじゃねえか！？ツッコミノイローゼでな！！」

「・・・・・・・・・はあ」

結局このパターンか、とため息をついた。。っていうかクレイが壊れた。とうとう壊れた。ついにやってしまった。ツッコミノイローゼ。

つーか私はどうしたら良いのか分からずとりあえずどこかに行くことは決定事項なのだろうから、鞄を持ってきて必要なものをつめこ

んだ。
そして未だに言い争いを続けている四人を見てまた一つため息をついて、すぅっと息を吸い込む。

「アンタたち静かにしないと夕飯抜きなんだから！！」

「「「「・・・・・・・・・」」」」

しーん、という効果音が一番ぴったりだろう、という位に四人は一斉に静まった。
お前ら始めっからそうしとけよ、ばか、とも思うけどもそんなこと口に出したら後々大魔王になにをされるか分からないのでやめておく。

「とりあえず、映画見て、そのあと買い物行こう。そしたらルイもレインも満足でしょ。
あー・・・海は今度行こう」

どうやら疲れるお出かけになりそうだ。
ていうか私ってこういうキャラだっけ。もっとはっちゃけてなかった？おいおいどうなってんだよ、もう。どっちかというと他人を振り回す奴だったでしょうが。
本当に疲れるお出かけだなあこりゃ。

STORY：08

――――ああ、私は今もの凄く隠れたい。むしろ穴を掘りたい。そんな気分だ。
何がってもう、人の視線だ。主に女性から。なんですかいコレ。
いや、理由は分かる、凄く理解しているのだ。今私はクレイ・ミヅキ・レイン・ルイの四人と映画館までの道のりを歩いているのだが、ここで感じるのがもの凄い視線。
いや、そりゃそうだろうと私も思う。なにしろ四人とも美形だ。一人でも視線があるだろうに、四人もそろっちゃ視線のオンパレードだ。バーゲンセールだ。（某サイヤ人より）

「ねぇ、あの人カッコよくない！？」「ていうかあのちっちゃい黒髪のこ可愛いー！」「外人さんなのかな？」「いや俳優かなんかで染めてんじゃない？」「じゃあ目は？」「カラコンっしょ。それにしても綺麗～」

以上が今さっき聞こえてきた会話だ。そして四人に熱～い視線を送ったのち、ついでに私にも何故か熱～い視線。
私だってこういう事態を予測して、男物のカジュアルな服を選んだ。ちなみに説明させてもらうと黒のタンクトップに黒と白のチェックの半袖の上着に下はジーパン、靴はコン〇ース、ちなみにキャップを被っている。
私はもともと乙女な顔つきではない、というかむしろ少年顔っぽい感じなので男に見えるはず。まあキャップ被ってるから顔も言うほど見えないしね。

「でもあの帽子被ってる子も可愛くない？」「うんうん、陰のある

感じが！」「ていうかあたしあの子が一番好み！」「え、でもあの子幼くない？」「ってことはアンタショタコン！？」

それ私のことっすか。まあ女が男の服を着てたら可愛らしくも見えるだろう。可愛い子だったらな！生憎私は自分の事を可愛いなんて思わない。っていうか思うわけがない。新手の嫌がらせですか、とかなんとか思っているとルイが言った。

「ねえ、あの女たち殺してもいいかな？」

「ややややめてくださいィィィィ！」

なに言ってんのこいつ！！必死で叫ぶとルイは不服そうにしながらも「はーあ」と盛大にため息をついた。ちょっと待てやこら。ため息つきたいのはコッチだっちゅーの！

「それにしても・・・さすがにここまで見られると困りますね？私たち、なにか変でしょうか？」

「ばっか、ミヅキさん気付いてないの！？それはあんた達が「ミヅキが振り返ざるを得ない顔だからだよ」

「――？」

ばっかお前！チゲェェェ！ルイはどんだけミヅキが嫌いなんだもう！反対だろ？あ、いやある意味ではあってるけど確実ルイが言ってる意味とはちげーよ！

しかもミヅキさんは意味分かってないし！ものっそい不思議そうな顔してるし！！

やっぱい私もツッコミノイローゼになりそうだ。

「――――クレイ、そのときは私と道連れだよ」

「俺は突っ込まない！俺は突っ込まないぞ！！」

「あーオレ腹減ったしぃー」

「早くつかないの？」

「ルイ、もう見えていますよ、あそこで「黙ってよ」

これもう傍から見たら変な集団じゃないか。なのに周りは仲良く話しているように見えるのかキャーキャー言っている、うるさい事この上ない。

「はあ」

私が何回目かも分からないため息をついたときは、もう映画館についていた。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

「どれにする？」

「鏡弥が見たいのでいいよ

鏡弥が見たいのは魔法学校のやつでしょ？額に稲妻の傷をもつ少年の物語でしょ？そうだよね？」

「うううん、私すっごいそれ見たかったんだあ！」

「あはっ、鏡弥ってば噛み過ぎだしー」

「レイン、やめたれ」

いや確かに私は魔法学校のやつ見たかったけど！某魔法学校映画見たかったけど！あれってもう脅しじゃん、真っ黒な笑顔してさあ！ビックリだよもうお姉さんは！

「あー・・・じゃあそれで」

四人＋私（一応女子がキャーキャー叫んでたしな）に恍惚したような表情のレジの店員（女）に言うと、店員は「はっはい！」とこれまた顔を赤くして言った。券を渡してくる時に無理やりな感じに手を触ってきてちょっとビクっとしたのは仕方ない。店員が言うには「ご、ご、五番スクリーンになりますっ！あちらの階段を上って（以下略）」らしい。

ああもう普段されれば良い気分なんだろうけどなんかムカつくよコレ。わー不思議だねこれ。あーもう疲れた。ここまで疲れるお出かけは初めてですよ！

とりあえず、無事に「お出かけ」が終わることを祈ろう。もうそれしか出来まい。

「ほら、早く行くよ！」

「鏡弥、いつからそんな口聞けるようになったの？」

「お前こそ居候だろうがあああ！！」

「・・・・・・・・・・」

「・・・ごめんなさい」

なんとなく敗北感を味わいながら私＋四人は五番スクリーンへと足を進めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5183c/

It is trip!!

2010年12月31日15時04分発行